

月刊

いろいろのも

第十四卷

六月号

裁判の権威はどくに

横浜地方裁判所で

民事裁判では

放火殺人犯とされたが

刑事裁判では

無罪となった

冤罪なのか

真犯人なのか

真相は

どこまでも

闇のなか

うそが通用するのは

警察署と

裁判所なのだから

でも今では

それが一般化して

世間でも

通用しているけど

ヒトゲノム解説

ヒトゲノム

解説された

というけれど

悪用されないこと

祈るのみ

息切れの日本

明治来

追いつけ

追い越せ

欧米に

謳った日本

いまや息切れ

人生を考え直して

みたい人は（一一三）

— 空海『即身成仏義』解説（一六） —

（五）— 四種曼荼羅各離れず

「四種曼荼羅（まんだ）各（おのおの）離れず」とは『大日経』に説かく、「一切如来に三種の秘密身有り、謂（いわ）く、字・印・形（ぎよう）なり」と。

字（じ）とは法曼荼羅（まんだら）なり。印（いん）とは、謂く、種種の。幟（ひようじ）、即ち三昧耶（さんまや）曼荼羅なり。形（ぎよう）とは、相好（そうごう）具足の身（しん）、即ち大曼荼羅なり。この三種の身に、各威儀事業（いぎじごう）を具す。是れを羯磨（かつま）曼荼羅と名づく。是れ四種曼荼羅なり。

*。は巾へんに票

現代語訳として、一月号でも採用させて頂きました、補足的説明の多い、金岡秀友訳の『空海即身成仏義』のものを、引用させて頂きます。

* * *

これまで、即身成仏義の第一句「六大無礙常瑜伽」について説明してきましたが、つぎに、第二句「四種曼荼羅各不離」について説明いたします。

「四種曼荼羅おのの離れず」という句については、『大日経』につぎのように説かれています。「すべての法身大日如来のあらわれかたに、深い意味をもつ真実のすがた（秘密身）が三種類ある。それは、文字（字）と印と形像（ぎようぞう）とである」と。（巻六、説本尊三昧品第二八）

この経文中の「字」とは、字秘密身、すなわち文字であらわされた法身を指し、字秘密身だけで構成された曼荼羅である「法曼荼羅」を意味します。「印」とは、仏さまを象徴する品物、すなわち三昧耶形（さんまやぎよう）を指し、そうした品々だけで構成された「三昧耶曼陀羅」を意味します。「形」とは、相好・容貌のそなわった形像（相好具足の身）を指し、その形像だけで構成されている「大曼荼羅」を意味します。この字・印・形には、それぞれに動作とはたらき（威儀事業（いぎじごう））がありますので、この動作、はたらきのすがたを示した曼荼羅を「羯磨曼陀羅」と名づけます。これが、「四種曼荼羅」の内容です。

* * * *

ここ一年程は、二頌八句からなる「即身成仏の偈頌」の解説をしてきました。最初の句である「六大無礙（むげ）にして常に瑜伽なり」が終わりました。今月号から、二句目の「四種曼荼各離れず」の解説に移ります。参考までに、次に、即身成仏の偈頌を再掲します。

六大無礙（むげ）にして常に瑜伽なり 体
四種曼荼各離れず 相
三密加持すれば速疾に顯わる 用（ゆう）
重重帝網なるを即身と名づく 無礙
法然に薩般若（さはんにや）を具足して
心数（しんじゆ）・心王、刹塵に過ぎたり
各五智・無際智を具す
円鏡力の故に実覺智なり 成仏

ここに出てきています、大曼陀羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅につきましたは、すでに、二月号で例示しています。もう一度、ご参照いただければ幸いです。

今回の曼荼羅についての説明は、『大日経』に書かれたものを、取り上げていますが、今回は、『金剛頂経』

のものが取り上げられます。二月号でも、述べましたが、曼荼羅といえば、『大日経』に基づいて描かれました、胎藏界曼陀羅と『金剛頂経』に基づいて描かれました、金剛界曼荼羅とがあります。

お大師さんは、この二つを、「金胎不二」として統一されましたが、私は、そのことを私の理論で説明できると、ずっと考えていました。この『即身成仏義』の解説を書くようになって、曼荼羅に関する本を読み、私が考えたとおりだったことが、明らかにになりました。

その考えとは、私の自己・他己双対理論の「自己」と「他己」が、金胎二つの曼荼羅が表す思想に対応しているとするものです。

曼荼羅に関しましては、何冊も購入し読みましたが、その中で、上の対応の確信を得た本は、古本屋で見つけました石田尚豊著『両界曼荼羅の智慧』（東京美術・昭和四四年刊・七五〇〇円）です。この方は、この本の基になっている名著とされる『曼荼羅の研究』（東京美術刊）で昭和五三年度の学士院賞をいただかれています。私も、この学士院賞を頂かれた本も借りて読みましたが、この本だけではなく、私が入手できました『両界曼荼羅の智慧』も、名著だと思います。とてもよくまとまり、感動して読んでいます。

なお、曼荼羅は絵図ですので、幾ら言葉で説明しましても、限界がありますので、上記の本からカラーコピー機でコピーし、今回、同封して送らせて頂きます。

また、第一巻の五月号と六月号で載せています、両界曼荼羅の構成の概略図を、次頁に再掲させて頂きます。当該の号をお持ちの方は、説明もありますのでご参照下さい。そして、この概略図とお送りしましたカラーコピーとを合わせてご覧いただければ分かりやすいと思います。なお、この再掲図は、勝又俊教編著『お経真言宗』（講談社刊）からの引用です。（図は略させていただきます）

さて、本題にかえりまして、「自己」と「他己」が、金胎二つの曼荼羅の思想に対応している、とする点ですが、前述の本から、私が、対応を確信しました部分を原文で引用させて頂きます。

* * *

金剛界曼荼羅は、尊像をかこむ月輪觀に象徴されているように、精神を統一し、瑜伽觀のうえに内心世界を、求心的に昂揚させてゆく、迫真的なミクロコスモス追求のマンダラであり、行によって最高の智慧を求めようとするため智の曼荼羅と称されます。

これに対して胎藏界曼荼羅は、さきに述べたごとく、

胎藏界大日の禪定印に象徴されるように、大日如來の法身の大光明に照らし出された精神の大宇宙を、隅々まで開放的にとらえようとしたもので、どのような過程を踏むことによって悟りに到達し、またそれを衆生に及ぼすことができるかという、段階的な論理過程を、開かれた眼で俯瞰的にとらえようとした、マクロコスモスのマンダラであるため、理の曼荼羅と称されるゆえんです。

開放と凝集、演繹と帰納、具象と抽象、理と智、慈悲と智慧という、宇宙の波動に相応ずる、精神の両極的な営みは、そのまま胎藏・金剛両部の曼荼羅として具現し、この両者はまた精神の深奥において大統一されるがゆえに、「金・胎は不二なり」と称されてきたのです。

（以下は、対応には関係ありませんが、私も強く同感しますので、引用させていただきます。）

このようにみてきますと、「両界曼荼羅」は、人間の心に内在する仏の世界の顕現であり、理想世界の縮図でもあるわけです。しかし現代人は、曼荼羅を前にして、最も重要な事を忘れてるように見えます。それは、曼荼羅の前に壇を築き、心を凝らして端坐し、ひたすらに「自利向上・利他向下」の菩薩道にはげむ行者が存在するということです。この行ずる求道者あつての曼荼羅であり、この重要なポイントが失われるとき曼荼羅は単な

る美的鑑賞物に墮してしまうからです。これはまさに、曼荼羅に対する、われわれ自身の心すべき、重要な問題であるのです。時代を超えて、常に生々たる命をもつ両界曼荼羅の、密教秘奥の原理を確信し、これによって、現実世界における法の実践活動に邁進することこそ、万里の波濤を超えて、はるばるわが国にもたらした空海（弘法大師）の、『両界曼荼羅』にかけた大誓願にほかならないからなのです。

* * *

引用が長くなりましたが、なかなか含蓄のある文章だと思います。

この中に出てきました「開放と凝集、演繹と帰納、具象と抽象、理と智、慈悲と智慧」は、「宇宙の波動に相應ずる、精神の両極的な営み」である自己と他己の働きだと言えるのです。言うまでもありませんが、二項対立の前項が他己の働きであり、後項が自己の働きです。

自作詩短歌等選

ヒラリーさんの回想録

アメリカの

元大統領

クリントンの

夫人・ヒラリーさんが

回想録を出版した

その中で

クリントン氏が

不倫を告白した時

息もできないほど

激怒したという

アメリカでは

インテリほど

キリスト教が

廃れているという

そのことを

思い出させた

日本文化論

日本人は自我が

未発達・未確立

西洋人は自我が

発達・強固

この図式を

価値観と直接に

結び付けて

西洋の文化を

高いと見る人多し

西洋人は

「自我―人格」で

生きている

日本人は

「情動―感情」で

生きていた

でも今

日本人は

「人の心を感じるころ」

も

(「感情」)

信仰も失って

西洋人よりも強く

自我主張ばかりをしている

る

西洋には

まだ少しでも

信仰が残っているのに

権利中心社会

人と人

ばらばらな世と

なりし今

権利ますます

義務に勝りぬ

日本の母に利他心

梅原猛氏は

『梅原猛の授業・道徳』

中で

次のように

言っているという

母の子に対する

利他心が

日本人の倫理規範の

基礎にある

もし

そうだとすると

それは昔のこと

日本人から

利他心が消えて

すでに久しい

時代錯誤も

はなはだしい

個人は強い日本人

日本人は
個人は弱い
集団になると強いと
言われてきた
そのことは
これまで
国のため
会社のためにと
集団になって
力を発揮してきたの
を見れば明らかだ
ところが
バブル崩壊後
事情が変わってきた
個人は強いが
集団になると弱いと
いうことだ

外国で

個人として活躍する
野球選手ばかり
サッカー選手ばかり
芸術家ばかり
学者ばかりだ

なぜなのか

それは一口で言って
他己がないということ

つぶれそうな銀行

銀行さん
高い給与は
似合わない
誰も信用
しまへんで

豊かさのお陰

若年フリーターが
年々増加している
という

勤労意欲も減退し
資質も低下している

パラサイト・シングルが
増え

少子化が加速する

ただ企業にとっては

リストラでき
コスト削減に
有用な人たちが

所得格差は

ますます広がり
不健全な社会も
加速されていく

これも

豊かさのお陰なの

愛国心と人への愛

愛国心が議論に
なっている
国を愛する心と
言い換えている人も
いるが

でも

問題なのは
愛国心を言うなら

その前に

人を愛する心を
言うべきなのに
それが

無視されていることだ

自作随筆選

愛国心と真の愛

最近、日本人の右傾化が目立っています。

その一つの現れは、愛国心（国を愛する心）についての論議が高まっていることです。

たとえば、日本人の精神形成に大きな影響を及ぼす教育基本法の改正についての答申が、中央教育審議会から出されましたが、その大きな特徴の一つとして、「国を愛する心」をはぐくむべきことが、うたわれています。

しかし、この答申を見ましても、では、その「国を愛する心」とは何なのか、につきましては、誰でも知っている分かったことだとして、全く説明がありません。果して、分かったことなのでしょうか。

私には、それを問わないことは、日本にとって、とても危ういことのように思えるのです。

少し検討してみたいと思います。

まず、初めに、教育基本法改正の答申中に出ていますこの言葉をめぐる文言を見てみたいと思います。

それは、第2章、1、の「日本の伝統・文化の尊重、

郷土や国を愛する心と国際社会の一員としての意識の涵養」という見出しで次のように書かれています。

「グローバル化が進展する中で、自らの国や地域の伝統・文化について理解を深め、尊重し、郷土や国を愛する心をはぐくむことは、日本人としてこれからの国際社会を生きていく上で、極めて大切である。（以下略）」

これを読みますと、日本人として国際社会を生き抜くために国を愛する心を育成することが大切だ、という風に取れます。まさに、ナショナリズムの高揚を狙ったものだと言わなければなりませんし、出だして言いました右傾化の一つの現れだと言えるのです。

では、真の愛国心とはどんなものなのでしょうか。

それを考えるには、まず、愛とは何か、について考えてみなければなりません。

これまでも、愛につきましては、何度か触れたことがあると思いますが、それを一口で言いますと、他者に対する無償の自己奉仕であり、自己犠牲と言えるものです。キリスト教で言いますと、神の愛（アガペー）を他者にも施す「隣人愛」ですし、仏教の言葉ですと、「慈悲」であり、具体的には「お布施」です。また、儒教の言葉ですと、己を制して他者を尊重する「仁」ということになります。

このように、聖者たちが教えるとおり、私たちは、人間である以上、誰彼の区別なく、普遍的に、人に対してこうした愛を注がなければならないのです。もつと言いますと、注ぐ素質を人間性の根幹として意識下に宿しているのです。ですから、人間の本質に反して、愛を注がないと、人間として不安定になり、不安や悩みを抱えることになるのです。つまり、精神的健康を維持することができなくなってくるのです。

こうした愛は、当然ながら、まず、身近にいる人に向けられます。ということとは、愛はまず家族に向けられるということになります。そして、次いで、家族を取り巻く、近隣に向けられます。こうして徐々に、その範囲を広げていくのです。近隣の次は国、国の次は国を単位とする地域、そして最後に、地域全体である地球、つまり人類全体に向けられるということになるのです。

この愛の向けられる対象は、どこまでも人です。その人には、誰であつても差別があつてはなりません。ただ、意識の範囲として、徐々に輪を広げていくだけです。自分の住む国に向ける愛も、隣の国に向ける愛も、意識がそこへ向かうとき、同等なのです。自分の住む国を愛するように、外国も愛さなければならないのです。

愛国心とは、そういうものなのです。

とりわけ自分の住む国だけを愛することになりますと、最後には、国と国との対立を招くことになります。

現在の民主主義制度では、国際的な会議などでは、必ずといっていいほど、まず、国益が主張されます。自分の所属する国に執着して、自分の国の利益のみを主張します。それはやがて対立を招き、遂には戦争にいたることになると思います。つまり、平和を保つことが、困難になるということです。それは、どんな人をも平等に愛するという愛の本質が、国への固執をしめす愛国心によって踏みにじられていく、ということを意味します。

それは、行き着くところ、愛の名によって、他者を不幸にすることだと言えます。そんなことがあつていいのでしょうか。愛国心をことさらに主張することには、こうした危険が潜んでいるのです。

私たちは、人間として、他者に奉仕はしますが、その対象自体に執着してはならないのです。どこまでも、愛は捧げるだけです。日本の国を愛しますが、日本の国に執着してはなりません。外国が困っていれば、日本の国と同等に愛の手を差し伸べなければならないのです。仁の精神に則れば、自国の利益を制しても、他国の利益を尊重しなければなりません。

そんなことをすれば、日本人の独自性が廃れると、感

じられるかも知れませんが、そうではありません。

日本には日本に独特な心性があります。それは、日本人は、伝統的には（いまは失われて来ていますが）、私の言葉で言いますと、「情動―感情（こころ）」で人と人が結ばれていたということです。

いつも言いますように、信仰や宗教が失われる傾向をもっています。民主主義制度では、あるいは、特定の宗教に世界が統一できない現状下では、宗教を全面に出さないでも、人々が平和に暮らせる「こころ」を大切にすることを世界に広めていくことが、日本に生まれ日本に育って日本を愛する人が行う、世界への貢献である思います。それが、日本人の愛国心ではないでしょうか。私たちの祖先の「宥和」の生き方を広めることが、世界の平和や人々の幸福の実現に役立つことができる、と私は信じています。

それが、人類愛につながる愛国心ではないでしょうか。単なる、ナショナリズム・国粹主義をこえて、人そのものを愛することになるのだと思うのです。

いまの日本は、多くの人が愛を失っています。家族から愛が消えています。これは、やがて社会の崩壊につながって行きます。今、行きつつあります。愛国心を言う前に、人を愛するところこそ、まず、言うべきなのです。

釈尊のことば（一一三三）

―法句經解説―

（三七六）その行いが親切であれ。（何ものでも）わかち合え。善いことを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦悩を減らすであろう。

この偈に、難しい言葉は、ありません。でも、現代人には、まったく言っていないほど、無縁な世界になっているのではないのでしょうか。

まず、「その行いが親切であれ」ですが、あらゆる行いを親切のこころから為すことは、なかなか難しいことです。誰でも、他者には親切にした方がよいことは、知っています。でも、その行いが自分の損になったり、自分が嫌いなことだったりしますと、いや、もつと言いますと、利益にならなかつたり、好きなことでなかつたりしますと、殆どの人は、知らないふりをしたり、無視したりします。多くの人は、親切にするのは、何か自分に見返りがあることを期待してなのです。いわゆる「ギイヴ・アンド・テイク」なのです。でも、ここで言うように親切にすることは、どこまでも「ギイヴ・アンド・ギイヴ」なのです。仏教で言いますと、お布施のこころ

でする行為です。

次の、「(何ものでも)わかち合え」の「何もの」には、物質的なものだけではなく、精神的なものも含まれると思います。人の喜びを我が喜びとし、人の悲しみを我が悲しみとすることも含まれるのです。私は、自閉症児の研究から、それを「情動の共有」といつています。それは、一般的な言葉では「人の心を感じるころ」ですし、また、心理学の専門用語では、「感情」と呼べます。仏教の言葉で言いますと、「慈・悲・喜・捨」の四無量心がそれに当たっています。どこまでも、他者のことを考えてする利他の行為です。

次の、「善いことを実行せよ」ですが、これが、また、現代人には、とても難しいことです。

いま日本人は、信仰と宗教をなくした上、かつては日本社会の特質であった「人の心を感じるころ」も喪失しています。こうした日本では、民主主義の思想のみが、人々の行動基準となっています。しかし、こうした社会では必然的に倫理規範が喪失していくのです。

倫理規範は客観的なものなのですが、民主主義社会では、人々の「損得と好き嫌い」という個人的・主観的な基準が、多数の人の賛成によって公共的・客観的なものとみなされ、人々の行動基準となっていくのです。しか

し、この本質上、それは、常に刹那的に変わっていきます。また、意見の対立が真に解消することはなく、常に衝突する運命をもっています。ですから、世の中から争いが無くなることはありません。平和は永遠に訪れることはないのです。

こうなりますと、「善」も相対化されます。絶対的な善は無くなるわけですから、何が善かは、その時の相対的な条件によって異なるのです。ということは、善を一般化して言うことは、出来ないということなのです。

仏教には、何度も書いてきましたように、絶対的な善として、十善戒（不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見）があります。また、キリスト教にも十戒があります。

何年か前、少年の殺人事件が相次いだとき、「なぜ人を殺してはならないのか」という子ども達の問いに、大人としてどう答えるかが問題にされたことがあります。まさに、何が善かが分からなくなっていることを示す、よい例だと言えます。

ですから、最後の「そうすれば、喜びにみち、苦悩を減らすであろう」という言葉も、ほとんど真実味を失ってしまっているのです。

後記

一、うつつとうしい季節になりました。人間も、太陽の光や高気圧・低気圧といった大気圧に生理的に影響されて、曇って雨が降ったり、低気圧になったりしますと、血圧や脈拍が下がって、心理的にも、うつつとうしいと感じるのだそうです。

二、雑草がどんどん伸びてきます。草刈り機で刈るのですが、最近、調子が悪くて、修理するのですが、なかなか本調子になりません。もう古くなったということのようです。草刈り機の他にも、今年は、機械類がよく故障しています。チェーン・ソーも新品に買い換えました。

また、ユニボ（パワー・シャベル）も何度も故障しています。他に、先月号に書きましたように耕運機も故障し、また、トラックも故障しました。なぜか、壊れるときは、続くものようです。今年は、当たり年（？）だから、年末ジャンボ宝くじでも買うか、と言っています。

三、タマネギとニンニクを収穫しました。

四、さつま芋を一五〇本植えました。里芋もたくさん植えています。先日、第一回目の追肥・土寄せをしました。

六、最近、自殺が増加しているばかりではなく、eメールによる集団自殺や自殺の道連れに他者を殺す事件がよく起こっています。私は、以前から、自殺には関心をも

っていましたが、先日、テレビで精神分析の権威が自殺について話をされていて、その中で、「自殺がなぜ起こるのか分らない」と言われるのを聞きました。

七、私は、自殺には、基本的には 自己機能不全（うつ病）によるもの、他己機能不全（統合失調症）によるもの（以上は自他の均衡の崩れによる）、自己と他己の統合の失敗によるもの、「自我—人格」による「情動—感情」の制御不全によるもの（とは「自我—人格」の機能不全による）、の四つがあるのではないかと、今は、考えています。細かい点を検討して、今後、論文や本にしたいと思っています。

月刊 こころのとも 第十四巻 六月号 （通巻 一六二号）	平成十五年六月八日 〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 ^{（注）}
---	--

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610-8-38660

